

実践報告

「幼児音楽Ⅰ・Ⅱ」授業実践報告と今後の課題
Music Education for Infants I&II: Report and Future Problems

長澤 順
Jun Nagasawa

【要約】

幼児教育において音楽が不可欠な要素の一つであることは言を俟たないが、近年、保育の現場で行われている幼児音楽教育の内容は、童謡や幼児の歌の歌唱にとどまらず、鍵盤ハーモニカ、合奏、リトミック、マーチング、音楽遊びなど実に多様を極めている。加えて、認定こども園の急激な増加に伴い、かつて幼稚園教育の一環として行われていた幼児音楽教育が保育園においても「音楽活動」として盛んに取り入れられるようになってきているため、これからの保育者は必然的に高い水準の音楽能力を求められることになる。

本稿では、保育者を目指す受講者にとって極めて重要な科目となる「幼児音楽Ⅰ・Ⅱ」の授業実践の工夫を報告するとともに、今後改善すべき課題について検討する。

【キーワード】

幼児 音楽 遊び 表現 保育者

1. はじめに

幼児教育において音楽が不可欠な要素の一つであることは言を俟たないが、近年、保育の現場で行われている実際の幼児音楽教育の内容は、童謡や子どもの歌の歌唱にとどまらず、鍵盤ハーモニカ、合奏、リトミック、マーチング、音楽遊びなど実に多様を極めている。加えて、認定こども園の急激な増加に伴い、かつて幼稚園教育の一環として行われていた幼児音楽教育が保育園においても「音楽活動」として盛んに取り入れられるようになってきているため、これまでしばしば認識されていた「ピアノが弾ければ保育者への道は開けている」といったような考えは既に通用しないのが実態であり、必然的に、これからの保育者はより幅広く、且つ高い水準の音楽能力を求められることになる。

このような現状を鑑みると、保育者養成課程における「幼児音楽」という科目は保育者を目指す受講生にとって極めて重要な科目であり、その内容の実用性が最も期待される科目とも言えよう。本稿では、本学の「幼児音楽Ⅰ・Ⅱ」の授業における授業実践の工夫を報告するとともに、今後の課題について検討したい。

2. 幼児音楽Ⅰ・Ⅱの概要

1) 教職課程における位置づけ

本科目は、本学幼児教育科が設置する幼稚園教諭二種の履修課程において「教職に関する科目」の中に位置づけられており、同免許状取得に関わる選択必修科目となっている。

2) 授業形式と受講学生の概要

1 クラス 44～45 名による一斉授業形式。幼稚園教諭二種免許状取得を希望する本学幼児教育科 2 年次生に向けて開講されている。

3) 到達目標

「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽Ⅱ」とともに、幼児教育の現場において必要な音楽の知識・技能を多面的に習得し、更にそれを実践する力を身に付けることが目標である。

4) 授業の内容（概要）

本授業の内容はおおまかに、①音楽実技、②指導法、③楽典（音楽理論）の3つから成る。音楽実技は、幼児音楽教育の軸となる幼児の歌の歌唱や手遊びの習得、音楽遊びの実践が主となっており、最終的に約 150 曲を「持ち歌」として蓄積することを目指している。指導法においては、幼児の目線で捉えた音楽がどのようなものであるかを理解し、幼児の発達段階に合わせた様々な音楽活動の立案や指導の工夫の考察に主眼を置いている。さらに、基礎的な楽典を学ぶことにより、特に読譜に対する知的理解に繋げている。

3. 授業構成の工夫

本来、「音楽」という科目は実技先行型であり、個々の受講者への技能指導や到達度を考慮した場合、少人数編成が望ましいと考えられがちである。しかし、先に述べたように、本授業の特性は幼児音楽教育に必要な技能・知識・実践力を網羅するところにあるため、反対に受講者が多数であることの利を生かし、次の3つの授業形態を組み合わせることで授業を構成することによって、むしろ少人数よりも高い教育的効果が合理的に得られると考えた。

- ①実技：受講者個人の音楽技能の習得（歌唱・手遊び等）
- ②講義：読譜や音楽指導に関する知識の習得（音楽理論、指導法、指導案作成等）
- ③演習：音楽活動を遂行する実践力の習得（音楽遊び・身体表現のグループ発表等）

表1 平成29年度「幼児音楽Ⅰ」シラバス

授業の概要及び授業計画	実際の幼稚園・保育園の日常的な音楽活動に倣った「月の歌」の歌唱、手遊びや音楽遊びなどの演習が中心となります。また、楽典の知識も習得し、楽譜への理解を深めます。
	【授業計画】
	第1回：オリエンテーション/保育者に求められる音楽技能
	第2回：4月の歌/子どもの身体表現/楽典①音名と繰り返し記号
	第3回：4月の歌/童謡の振り付け/楽典②調性と調号
	第4回：4月の歌/手遊びと遊び歌/楽典③コード(メジャー・マイナー)
	第5回：5月の歌/乳児クラスの音楽遊び①/楽典④コード(セブンス)
	第6回：5月の歌/乳児クラスの音楽遊び②/楽典⑤音楽記号
	第7回：5月の歌/3歳クラスの音楽遊び
	第8回：6月の歌/4歳クラスの音楽遊び
	第9回：6月の歌/5歳クラスの音楽遊び
	第10回：6月の歌/音楽遊びを創る
	第11回：7月の歌/鍵盤ハーモニカ指導法①指導計画と導入
	第12回：7月の歌/鍵盤ハーモニカ指導法②実践と問題点
	第13回：7月の歌/鍵盤ハーモニカ指導法③指導案作成
第14回：8月の歌/簡易伴奏の方法と実践	
第15回：8月の歌/幼児音楽とメディア/楽典のまとめ	
定期試験	

このような理由から、本授業のシラバスは毎回複数の内容で構成されている。今年度の「幼

児音楽Ⅰ」のシラバスを表1に示す。

表2は、表1のシラバスに基づいた授業の中でこれらの3つの授業形態（実技・講義・演習）がどのように分布されているかを示したものである。毎回継続する必要がある項目を●、複数回継続又は間欠で反復する必要がある項目を▲、1回で完結する項目を■で示す。

表2 平成29年度「幼児音楽Ⅰ」における授業形態の分布

	実技	講義	演習
第1回	オリエンテーションー保育者に求められる音楽技能ー		
第2回	●歌唱（4月の歌）	■楽典①音名と繰り返し記号	■身体表現
第3回	●歌唱（4月の歌）	■楽典②調性と調号	■童謡への振付
第4回	●歌唱（4月の歌）	■楽典③コード（メジャー・マイナー）	■手遊びと遊び歌
第5回	●歌唱（5月の歌）	■楽典④コード（ドミナントセブンス） ▲音楽遊び①音楽遊びとは	
第6回	●歌唱（5月の歌）	■楽典⑤ ▲音楽遊び②乳児クラスの音楽遊び	▲音楽遊び実践演習
第7回	●歌唱（5月の歌）	▲音楽遊び③3歳クラスの音楽遊び	▲音楽遊び実践演習
第8回	●歌唱（6月の歌）	▲音楽遊び④4歳クラスの音楽遊び	▲音楽遊び実践演習
第9回	●歌唱（6月の歌）	▲音楽遊び⑤5歳クラスの音楽遊び	
第10回	●歌唱（6月の歌）		▲音楽遊び創作発表
第11回	●歌唱（7月の歌）	▲鍵盤ハーモニカ指導法①指導計画と導入	
第12回	●歌唱（7月の歌）	▲鍵盤ハーモニカ指導法②実践と問題点	▲鍵盤ハーモニカ演習
第13回	●歌唱（7月の歌）	▲鍵盤ハーモニカ指導法③指導案作成	
第14回	●歌唱（8月の歌）	■簡易伴奏の方法	■簡易伴奏の実践
第15回	●歌唱（8月の歌）	■幼児音楽とメディア ■楽典のまとめ	

●毎回継続 ▲複数回継続又は間欠で反復 ■1回で完結

4. 主な授業項目と指導上の工夫

幼児音楽の授業内容が多岐に渡ることは既に述べたが、ここではその中でも最も重要と思われる項目を取り上げ、授業内容に取り入れるに至った理由ともいべきその重要性和指導上の工夫について述べたい。

(1) 幼児の歌の歌唱（実技）

1) 幼児の歌が担う役割

幼児になぜ歌を歌わせるか。一般的に、歌唱を始めとする幼児への音楽的アプローチは子どもの情操面の発達の助けになると認識されている（例えば中川ら,2015）。しかしその一方で、言葉の発達にも大きく影響していることが指摘されている（久富ら,1991）。

実際に、幼児の歌の歌詞に着目すると、食べ物や動物の名前（名詞）、動物や人の行動（動詞）、色や状態（形容詞）などが反復的に現れ、子どもが言葉を獲得する手段の一つと言っても過言ではない。逆に、保育者の視点から考えた場合、一緒に歌うことは子どもたちとのコミュニケーション手段の一つとなり得る。このようなことから、幼児の歌は保育者が習得すべき幼児音楽の筆頭に位置づけられる項目であると言える。

2)指導上の工夫

多くの保育園や幼稚園では、各クラスの担任がその月の行事や季節、子どもの年齢や発達に応じた曲目を「今月の歌」として3~5曲ずつ設定し、およそ1ヶ月間同じ曲目をほぼ毎日歌い続けることが習慣化されているが、本授業ではこれに倣い、「今月の歌一覧」を作成し、月単位で約10~15曲の習得を目指している。保育園や幼稚園のひと月あたりの曲数と比較すると大幅に数が多くなるが、これは全年齢に対応することを考慮した結果である。各月の最初の週は、受講者が未習得の楽曲から優先的に実践し、ある程度覚えてきたら習得済みの曲目も加えてレパートリーを定着させていく。

各月の最終週まで毎回同じプログラムを繰り返し歌うことにより、月末には暗譜での歌唱が可能となる。初見の楽曲に関しては、実際に子どもに歌を教える場合と同様に、楽曲を細かく区切ってフレーズごとに歌わせ、それらを少しずつ繋げて習得させる。また、毎回の授業における歌唱の伴奏は受講者が当番制で行い、保育者の立場を疑似体験することによって、自己のピアノ伴奏に対する客観的評価を得るとともに課題の発見を促している。

このように、本授業では、保育の現場で実践されている方法をそのまま取り入れることにより、①歌唱の習慣化、②月ごとの曲目の適切な配分方法、③多数の楽曲の習得、④子どもへの歌唱指導法の教授、⑤伴奏の実践の5つを短時間で合理的に行っている。

(2)鍵盤ハーモニカ指導法（講義と演習）

1)楽譜を用いることのできない音楽指導

特に初任者や経験の浅い保育者が直面すると考えられるのが「楽譜の読めない子どもに楽器演奏を教えることの難しさ」であろう。私たち大人は、歌を歌うにしても楽器を演奏するにしても楽譜があつてこそ音楽を成立させることが出来るのだが、幼児に対してそれを適用することはできない。簡単に言ってしまえば、幼児への音楽指導は「模範提示（保育者）と模倣（幼児）」の繰り返しである。つまり、保育者の行うことをそっくり真似させることで、音の出し方や指の動き、リズムパターンなどを子どもに覚えさせていく方法が最も近道であると言えよう。

この授業では、楽器指導の中でも特に保育者が困難を感じることが多い「鍵盤ハーモニカ指導法」に重点を置いている。初めて鍵盤状の楽器に触れる幼児を指導する際、最も重要なのは、子どもに「難しい」という印象を与えないことである。そのために、保育者は子どもの興味を喚起するための工夫を凝らし、スムーズに演奏に導く指導法を立案する力を身につけなければならない。

2)指導上の工夫

通常、指導法の授業は講義形式で行われることが多い。しかし、鍵盤ハーモニカ指導法の

場合、楽器演奏という実技が柱となっているため、実演を含む演習が不可欠となる。そこで、本授業における「鍵盤ハーモニカ指導法」は以下のように段階的に行っている。

講義	鍵盤ハーモニカに関する知識の習得 <ul style="list-style-type: none"> ・楽器の特性、構造、歴史、管理上の注意等 ・幼児に対し指導を開始する適切な時期とその理由について
	
演習	指導の流れの体験 <ul style="list-style-type: none"> ・教員を保育者に、受講者を幼児に見立て、楽器を用いて「保育者による模範の提示と幼児によるその模倣」に基づいた指導の流れの実演を行う ・子どもが興味を示す導入の実例の提示 ディスカッション <ul style="list-style-type: none"> ・実際に子どもを指導する場合の語彙について ・子どもにとって「難しい」と感じることは ・指示出しのタイミングの重要性について
	
実践	指導案の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・4歳クラスで初めて鍵盤ハーモニカを指導する場合を想定した指導案の作成

(3)音楽遊び（演習）

1)身体表現の重要性

大抵の子どもは歌いながら体を動かすことが好きである。音楽に合わせて体を揺らしたり、手拍子や足踏みをしたり、歌詞に登場する動物の動きを真似るといったような個々の身体表現に始まり、年齢が上がるとともに、歌いながら手を繋ぐ、輪になる、歌い終わりにジャンケンをするなど、ルールや遊びを意識した動きへと変化していく。近年、子どもの音感やリズム感を養う目的で音楽遊びやリズム遊びを幼児音楽教育に取り入れているケースが多々見受けられるが、音楽遊びの本来の意義は、子どもの表現力と想像力を助長するところにあると考えられる。

2)指導上の工夫

音楽遊びを題材とするテキストは数多く刊行されているが、その殆どは「一つの楽曲に対し一つの遊び方」という構成になっているため、楽曲の難易度や遊びの種類によって対象年齢が制限されてしまっている。また、子どもたちにあまり知られていない楽曲が用いられているケースや、保育者が改めてピアノ伴奏を練習しなければならない場合も多く、保育者の視点から見ても、音楽遊びそのものが「特殊なもの」「難しいもの」と捉えられがちである。音楽遊びを日常的な音楽活動として取り入れるためには、保育者による音楽遊びへの抵抗感を軽減し、幼児にとっても保育者にとっても「すぐに」楽しめる手段を模索しなければなら

ない。そこで、本授業ではテキスト教材に頼らず、筆者が独自に考案した音楽遊びを紹介し、その創作のしかたについて教授するという方法を試みている。オリジナルの音楽遊びは以下の3つの条件に基づいて創作した。

- ① 幼児と保育者の双方が歌い慣れた（既に習熟している）楽曲であること。
- ② ピアノ伴奏が容易であること。
- ③ 月齢や年齢に合わせて遊びの難易度を段階的に上げ、一つの楽曲に対しいくつかの遊び方ができるように工夫すること。

これらの音楽遊びを受講者が実際に体験し、またその楽曲と遊びの組み合わせのパターンを学ぶことにより、音楽遊びそのものだけでなく創作のノウハウを同時に習得できるよう考慮した。本授業においては、グループワークによる音楽遊び創作発表を行い、相互評価の機会を設けている。

5. 今後の課題

以上述べてきたように、本授業は保育者の将来を見据え、理論的側面と実践的な内容の双方を重視した授業実践の工夫を重ねてきた。とはいえ、限られた時間の中で幼児音楽全般に対応する内容をカバーしきれていないのが現状であり、今後取り組むべき課題も多く残されている。

第一の課題は、楽典（音楽理論）の授業内容の再検討である。表3は、平成28年度の「幼児音楽Ⅱ」の最終授業（平成29年1月20日）において受講者132名を対象に実施したアンケート調査の結果である。他の項目に比べ、楽典（音楽理論）に対して「嫌い・苦手」と回答した受講生が圧倒的に多い結果となっている。

表3 音楽に関するアンケート調査結果

項目	好き・得意	嫌い・苦手	どちらでもない
歌唱	79%	6%	15%
ピアノ	58%	9%	33%
弾き歌い	46%	28%	26%
合奏	79%	6%	15%
振付・身体表現	34%	9%	57%
楽典（音楽理論）	0%	69%	31%

また、楽典を苦手と感じる理由については下記のような記述が見られた。

- ・ 専門用語が多く理解し難いから
- ・ 内容が複雑で重要点が解りにくいから
- ・ 音楽経験はあるが、楽典と実技とを関連させて学んだ経験が浅く実用的でないと感じるから
- ・ 練習問題などを解く機会が少なく身に付いていないと感じるから
- ・ 保育者に必要な知識とは思えないから

実際、音楽経験の有無に拘らず、楽典に関する受講者の理解度は高いとは言い難い。確か

に、科目としての「音楽」と「幼児音楽」とは似て非なるものではあるが、楽典の基礎知識が求められるという点では変わりはない。幼児音楽全般をよりの確に理解するためには理論面の強化は不可避であろう。今後の課題として、楽典を単独の講義項目として扱うのではなく、実践に結びつけた授業構成を検討していきたい。

第二の課題は、歌唱指導の見直しである。現在のところ、本学には歌唱技能の習得に特化した授業は設置されていない。したがって、本授業の中に一定の時間を設けて歌唱指導を行っているが、一斉授業のため受講者個々の技能指導まで至っておらず、歌唱技能の体得に関しては不十分と言わざるを得ない。また、保育者が行う「弾き歌い」は歌唱とピアノ伴奏を組み合わせた演奏技能であるが、歌唱技能よりもピアノ技能が優位となり、バランスを欠いた演奏となることも懸念されるべき点である。受講者の歌唱力向上のためには、発声を初めとする歌唱技能を専門的に体得する機会を確保するべきである。

そして、第三の課題として挙げられるのは、視聴覚教材の導入である。多くの受講生は、1短期間の実習以外において、保育者による音楽的アプローチに対し、幼児がどのような反応や行動をするか観察する機会をほとんど得られていないのが実情である。このため、指導案を作成する際に具体的なイメージを持つことができず、戸惑いを感じる受講者が多数見受けられる。各年齢に合わせた音楽活動を立案する力を養成するためには、音楽面における子どもの発達や、実際の音楽活動の様子などをテーマに作成された視聴覚教材の活用を検討すべきであろう。

今後、これらの点について改善を図るとともに、常に変化する幼児音楽教育の実態に着目しながら時代のニーズに応えた保育者養成に努めていきたい。

文献

- 1) 中川華那・片山美香 (2015) 「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究—一人とかかわる力を育むために—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』, 5, pp.73-82.
- 2) 久富さよ子・棚田聡美 (1991) 「幼児の歌の発達にみられる言葉、旋律、リズムの関連性 (自然科学編)」中村学園研究紀要, 23, pp.121-126.